

厚岸湖のアサリへの パーキンサス原虫の寄生状況調査による 産業への影響把握
東京農業大学 生物産業学部アクアバイオ学科 水圏生産科学研究室
渡邊 研一

【諸言】

アサリ *Ruditapes philippinarum* はマルスダレガイ科に属する二枚貝の一種であり、海岸の砂泥中に生息し、日本全国に分布している。古くから食用として利用されており、重要な水産資源である。

しかしながら、日本全国のアサリ総漁獲量は、ピーク時には16万トンを超えていたが、1983年を境に大幅に減少し、現在では、ピーク時の4分の1程度で横這いとなっている。

この要因としてナルトビエイ *Aetobatus flagellum* やツメタガイ類による食害や干潟の埋め立てによる生息環境の悪化、パーキンサス属原虫(本原虫)の大量寄生によるパーキンサス症等が考えられている。

また、全国で漁獲量の減少が認められた1983年以降も北海道においては、漁獲量が増加傾向となっている。更に、北海道道東域のアサリ漁獲量では、1983年以降、厚岸で増加傾向を示した。

パーキンサス症は、本原虫の寄生によって引き起こされ、1989年には、ポルトガル南部で大量死したアサリ類 *Ruditapes decussatus* において、本原虫が検出されている。主な寄生箇所は、アサリ等の2枚貝の鰓および外套膜等の結合組織であり、運動機能を持たない栄養体を形成し、分裂増殖する。また、アサリの殻長の増加によって本原虫の寄生率が増加することが報告されている。

日本国内においては、2001年までの調査で北海道道東域を除く、全国で本原虫の寄生が確認された。これは、本原虫が20℃以上の水温で活発化する過去の報告と一致しているが、調査から13年経過しており、現在の寄生状況については不明である。

そこで、北海道道東域におけるアサリの主要生産地である、厚岸に生息するアサリにおけるパーキンサス属原虫の寄生状況を調査した。

また、本原虫の培養に有効とされるチオグリコール酸培地において、これまでの報告で使用されていたBD BBL TM Fluid Thioglycollate Medium (以下培地 A) と、現在使用しているチオグリコール酸培地 II'栄研'(以下培地 B)の2種の培地を用い、道外産アサリにおける本原虫栄養体検出率の差を調査した。